

居芝猿と居芝犬

犬芝居と猿芝居

大い猿こが牙を磨きあつて 両方の主人をもうけさせた話

安成貞雄

ある所に、犬芝居の小屋と猿芝居の小屋と向き合つて建つて居た。犬芝居には犬が三十四ばかり、猿芝居には猿が三十四ばかり飼つてあつた。犬芝居の主人は、其の犬と猿とを朝から晩まで働かせて、せつせと金を貯めて居た。

つた。中には氣が變になつて、主人に噛みつく犬やら、主人を引掻く猿やらが出来た。それほどの無茶な事の出來ない犬や猿は、病氣になつて黙つて死んで行つた。犬や猿は氣が狂つて死んでも替はせられて一匹前にするに、食物や何かの費用がかかる。それがわからぬと双方の主人は、今度は犬と猿とを優待した。金ピカの袖なし羽織を着せたり、飾毛のある帽子を冠せたりした。毛色の悪くならない位の食物をあてがつて、等の上手下手に依つて、位どか動ける様にもした。それで犬と猿とは何んだか主人を大變親切な好い人の様に考へ出して、又せつせと忠勤を勵んだ。

「前達達は、あの犬の奴等が蟹の味方をして、前達の先祖を殺した事を知つて居るか。前達は先祖の靈を慰める爲めに、犬の奴等に勝たなければならぬ。何んでも働け、働かさへすれば犬の奴等に吠面かゝせてやることが出来る。犬は主人の話を聞いて、猿が憎く、猿は主人の話を聞いて、犬が憎く、なつた。犬と猿とは牙を磨き瓜をこすつて睨み合ひながら、せつせと藝を勵んだ。

朝は暗い中からいやく起きて、ボロボロ寒くて飯屋に遣入り水ばなよきく四辻に立てば、さても身にしむ節走の風が、銀へと寒くて身ふるひするよ。二層じやく工場の手傳行けよく主人買に買われのそりく出掛けて行けば、傍若無人が猿の種汗を流してコンクリートすればやがて出來たる西洋節も、俺等が住まへる譯ぢやなし、俺等が芝人の血を吸ふ、金持が住んだから猿の種俺等は又養蠶場へ行つてやつさつと夜の服も髪もにいくら働いても箱物は着られず、金持が着るんだから猿の種俺等は又河岸や停車場へ行つて重い砂糖やら来やらし、ヨイショイと運べども、金持が喰ふんだから猿の種俺等は又銀山へ行つて、数千尺の地の底から、金や銀やを掘りだすのだけれど、金持はさうはせず、これでは何んでも彼んが種

は、犬も、猿も、髪も、毛色も、悪くなつて、ひよろしくして、ロクに

犬に油をかけた。

へて、せつせと主人の懐をふくらませてゐた。

これでは何んでも彼んが種